
真紅の血潮に猫は笑う

江渡捨文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真紅の血潮に猫は笑う

【Nコード】

N3131M

【作者名】

江渡捨文

【あらすじ】

ある日、妻が猫を拾ってきた。だが、その猫は……。猫嫌いの夫が体験した恐怖とは。

(前書き)

最初に警告させて頂きます。

この作品には猫好きの方にとってショッキングな内容が含まれております。

猫好きの方は読まない方がいいかもしれません。

ちなみに私は猫好きで、二匹飼っています。

男はうんざりしていた。妻がまた猫を拾ってきたのだ。頭を抱える男を尻目に、妻は二匹の猫にミルクを与えていた。

「なあ、アリス。なんだってまた猫を拾ってきたんだ」

そう尋ねるとアリスは屈託の無い笑顔で答えた。

「だって、可哀想じゃない。この子は寒空の中で震えていたのよ。あのまま放っておいたら死んじゃうわ。それよりこの子に名前を付けたの。リリーよ。可愛いでしょう」

言っても無駄だということを知っていた。何を言ったところで彼女は子供のように笑うばかりでまともにとりあいはしないだろう。つい先日、一匹目の猫を拾ってきた時もそうだった。ジムはかなり強い口調で彼女を叱ったのだが、聞く耳を持つとせよ、拳句の果てには泣き出してしまった。そして仕方なく、猫を飼うことを許可したのだった。

「ジム、あなたもこっちに来て見てみなさいよ。とっても可愛いわよ」

ジムは嫌々ながらもソファから立ち上がると、ケージの中でじやれあう二匹の子猫を見下ろした。妻が今日拾ってきた子猫は短い灰色の毛並みをしていた。先日拾ってきた猫は真っ白で長い毛並みだ。ジムはその姿を可愛らしいとは思わなかった。

ジムはもともと動物が好きではなかったが、猫は特に嫌いだった。あの何を考えているのかわからない大きなまん丸の瞳で見つめられると不安な気持ちになる。あの目はそう……まるで……奈落の底のようだ。

その時、拾ってきたばかりの猫がもう一匹の耳に噛み付いた。

「こら、喧嘩しちゃ駄目じゃない、リリー。ローズと仲良くしなさい」

アリスはすぐに引き離れたが、噛み付かれたローズの耳からは少

し血が滲んでいた。二匹もいるんだ、喧嘩にもなるさ。いつそ大喧嘩して死んでしまえばいい。とジムは心のなかでばやいた。実際のところ、その通りになった。

翌日、ジムがうなされながら目を覚ますと、猫が胸の上に乗って顔をじっと見つめていた。

驚いたジムは悲鳴をあげながら猫を跳ね除け、飛び起きた。吹き飛ばされたリリーは空中で回転し、体操選手のように見事な着地を決めると、しぶしぶと部屋の隅へと移動してごろんと寝そべった。

最悪の目覚めだった。ジムは後ろ足で頭を掻いているリリーを爆発物でも扱うかのように慎重に捕まえると、一階の居間へと降りてケージの中に戻した。

「お前、どうやってケージから出たんだ？」

尋ねるとリリーは答えるようにニヤーンと鳴いたが、ジムに猫の言葉を理解することは出来なかった。

「どうかした？」振り向くと寝室から起きてきたアリスが立っていた。

「こいつ、ケージから出て寝てる俺の上に乗ってたんだ」

「あら、ケージから出ちゃったのね。元気な子じゃない」

アリスは驚いた風も無くそう言うと、ケージの中の猫の頭を撫でた。もつとでかいケージがいるな。そう、牢獄のような。思いながらジムはコーヒースプーンを啜った。

猫のいる生活にもようやく慣れてきた。そう思っていた矢先の事だった。

仕事が終わりに、玄関のドアを開けたジムをリリーが出迎えた。その口に鼠の死骸が啞えられているのを見て、ジムは仰天し、喚いた。「アリス！ アリス！ 大変だ、猫が鼠を食ってるぞ！」

騒ぐジムの声に驚いたアリスがキッチンから飛び出した。その拍

子に壁に足の指をぶつけた。その指をさすりつつ、涙目になったアリスが言った。

「どうしたの？ 痛い、足の小指をぶつけちゃったわ！」

「見るよ、こいつ、鼠を食ってやがる」

「なによ、そんな事で。あらあら、鼠をやっつけたのね。とつてもいい子よ。リリー」

リリーは啞えていた死骸を床に吐き出すと、どうだ、すごいだろ？ と言わんばかりにジムを見上げた。緑色に輝くその瞳を見て、ジムは気味の悪さを通り越し、恐怖を覚えた。

だがアリスは顔を真つ青にして身震いしている夫の事など気にも止めずにニコニコと笑い、リリーの頭を撫でていた。

「ジム、悪いけどこの哀れな鼠ちゃんを庭に埋めてきてやって」

楽しそうにそう言い放つ妻にジムは文句の一つでも言つてやろうと思つたが、無邪気に笑う妻の姿にその気も失せた。一言わかつたよ、と言うと鼠の死骸をタオルで包み、庭の端にスコップで穴を掘つてそこへ埋めた。

その晩、彼らは話し合つたが、なんの進展もなかった。ジムがケージに屋根をつけたらどうだと提案すると、アリスは、もう二匹とも大きいし、そろそろケージは要らないわと言う。猫が好きじゃないんだと言うと、アリスはいつもの笑顔ですぐに慣れるわよと言いつつ、二匹も飼えないよと言えば、彼女は大丈夫よ、一匹も二匹も変わらないわ。それに、世話をしてるのは私よと言つた。

結局、いつも通りジムが引き下がることになった。そして、とうとう事件は起きた。

それはうだるような暑い夏の日曜の事だった。

ジムは炎天下の中、汗だくになりながら庭の草むしりをしていた。庭の至る所に我が物顔で生い茂った雑草たちと格闘していると、家の中から悲鳴が聞こえた。アリスの声だ。

アリス！ そう叫び、玄関のドアを乱暴に開くと、飛ぶ勢いでア

リスがいるはずの居間へと急いだ。

居間にアリスはいなかった。その時アリスが大声でジムを呼ぶ声が聞こえ、寝室へと駆け上がった。

そこでアリスは立ち尽くしたまま、しくしくと泣いていた。

何が起きたのか尋ねようとしたジムの目に、異様な光景が飛び込んだ。寝室の床一面が真っ赤な血で染まり、ところどころに猫の毛のらしき毛が散らばっていた。

込み上げる吐き気を堪えながらジムは尋ねた。

「アリス、いったい何があった」

「わからないわ、わからないの。そういえばさつきから猫ちゃんを見なくなって思ってたの。それで、寝室を見たら血だらけで……。ああ、なんてこと、この白い毛、これはきつとローズの毛よ。お願い、ジム。ローズとリリーを探して」

猫を探す？ 死んだ猫と、その猫を殺した猫をか？ ジムには確信があった。間違いなく、リリーがローズを殺したのだ。そうに決まっている。白昼堂々忍びこんで、猫を殺す強盗はいまい。

だが何にせよ、このまま放っておくわけにもいかず、ジムは猫を探し始めたが、結局のところ家の中に猫はおらず、ジムは庭の物置小屋の中で二匹の猫を見つけることになった。

もしかしたらどこから外に出てしまったのかも知れない。そう思い、ジムは庭へ出た。もっとも、ドアも窓も閉まった家の中から自力で外へ出る猫の話など聞いたことはなかったが。

ガタン、という音を聞き、ジムは物置小屋を振り返った。

見ると、物置小屋の扉はわずかに開いている。はつきりと覚えていたわけではないが、草むしりをしていた時には扉は閉まっていたように思えた。

ジムは物音を立てないように小屋へ近づくと、ゆっくりと扉を開いた。

小屋の中は薄暗かったが、様子が伺えない程ではなかった。

小さな明かり窓から太陽光が差し込み、金属製の棚に積まれた妻のガーデンニング用品を照らしていた。

意を決して中へと入ると、小屋の奥に何かを見つけた。

それは変わり果てたローズの亡骸だった。全身傷だらけで、手足はあらゆる方向へ曲がり、純白だったその毛並みは真っ赤に染まっていた。凄惨なその様子にジムは呻いた。

突然、棚の奥から何かがジムの目の前に飛び出した。

驚いて身を翻したジムは、棚に頭をぶつけた。棚は大きく傾ぎ、ガタガタと音を立てたが倒れはしなかった。

飛び出したのはリリーだった。リリーは薄暗い小屋の中でその双眸をキラキラと輝かせ、ジムをじっと見つめていた。

ジムは額から流れた血を袖で拭くと、棚にあった袋を掴み、広げた。園芸用の土が入っていた頑丈な麻袋だ。

袋を構え、ジリジリと歩み寄るジムをリリーは身じろぎもせずにとだ見上げていた。

ジムは出来る限り素早い動作でリリーの頭から麻袋をかぶせようとしたが、リリーは俊敏な動きで身を翻しそれを躲した。

そしてジムの脇を走り抜け、開いたままにしておいた小屋の扉をくぐった。

追いかけて小屋を飛び出したが、リリーはすでに消えていた。

家の中に戻るとアリスはすすり泣きながら寝室に飛び散った血を拭いていた。

「アリス、ローズを見つけた。でももう死んでいたよ。リリーは…どこかへ逃げてしまった」

そう言うとアリスはわっと泣き出した。ジムは大粒の涙を流しながら泣きじゃくる妻の体をそっと抱きかかえた。

ジムは内心ほっとしていた。リリーは消えた。これで何の問題もないはずだ。彼女も、こんなことがあった以上、もう猫を飼いたいなんて言い出すことはないだろう。少なくともしばらくの間は。

彼女が落ち着くと、ジムはローズの亡骸を埋めるために庭の端に

穴を掘ろうとした。だが、ここに鼠を埋めた事を思い出し、場所を変え、庭の反対側を掘り始めた。

穴を掘りながらジムは思いを巡らせた。どうしても逃げたりりーの事が気にかかった。アレはどうやって家を出た？ 大体、血の跡も残さずにどうやってローズを物置小屋まで運んだんだ。背中に背負いでもしたのか？

だがそれよりも気にかかる事があった。ジムはどうしても頭の中からその疑問を拭い去ることが出来なかった。

あらかた作業が終わると、ジムはスコップを地面に突き刺し、一人呟いた。

「まず、鼠を殺した。次に、猫を殺した」

「……次は？」

事件から二ヶ月ほど経つと、アリスはすっかり元気を取り戻していた。さすがにあれ以来猫の話はしようとはしないが、少なくとも表向きにはシヨックから立ち直っているように見えた。

どちらかと言うと、問題はジムの方にあった。彼は消えたりりーの事をいまだに考えずにはいられなかったのだ。その上、ジムの猫嫌いはますます悪化し、いまや猫恐怖症と言ってもいいくらいだった。

三日ほど前、仕事を終え帰路についている時に塀の上から彼を見つめる野良猫に気づいた時など、ジムは腰を抜かし、しばらくの間足が震え、立ち上がることもすら出来ない有り様だった。

まったく、情けないことこの上もないな。などと思い出しながらジムは新聞を読んでいた。

ある一つの記事にジムの目が奪われた。

「喉を切られた男女の死体が見つかる、殺人事件か？」

ジムは首を振り、馬鹿な、事件は怖いが、これがリリーとなんどの関係がある？ 猫が殺したとでも？ 俺は何を考えているんだ、ばかばかしい。と思いつつ、アリスのいれたコーヒーに口を付けた。

だが、ジムはそう思っていた。もちろん、あの猫が、リリーが殺したのだと。

「ジム、どうかした？」

尋ねた妻の声に我に帰った。

「どうもしないよ、ただ、事件があったそうさ。カップルだかが殺されたらしい。アリス、君も気をつけるよ」

「あら、この町で？ 怖いわね、気をつけるわ」

怖くもなさそうにアリスはそう言った。

「アリス、リリーをどこで拾ったんだい？」

そう言ったあとで、ジムは自分の口から出た言葉に驚いた。俺はなぜそんな事を彼女に聞いたんだ。せつかく立ち直っているというのに。

アリスは重い口調で答えた。

「……リリー。リリーを拾ったのはそう、例の町外れの猫屋敷のそばよ。知ってる？ 猫おばさんの猫屋敷」

「ああ、知ってるよ。アンダーソンさんの猫屋敷だろ。ここらじゃ有名だ」

「そう……、その辺りで雨に打たれて凍えてたのよ、可哀想に。だから拾ってきたの。でもジム、どうして今更そんな事を聞くの？」

ジムは後悔した。まったくだ、なぜそんな事を聞いたのか。

「すまない、アリス。無神経だった。許してくれ」

そういいながら立ち上がり、ジムは妻の頬に口づけをした。

週末の休みにジムは町外れまで足を運んだ。どうしても猫が気にかかった。

ちょっととした小高い丘の上に、件の猫屋敷が佇んでいた。屋敷とは言うがそれほど大きくは無い。古びてはいるが二階建ての普通の家だ。手入れもしていないのだろう、白かったであろう壁は黄ばみ、屋根の瓦はどこどころ剥がれている。

庭に猫が数匹たむろしているのを見て、ジムは逃げ出そうとも思

ったが、結局はそうせず、玄関のベルを鳴らした。

ふと、自分は何をしているのか。一体猫おばさんに何を聞くというのだ？ という思いがもたげたが、どのみちベルに返事は無かった。

留守にしているらしい、さあ、帰ろう。そう思いながらもジムがとった行動は全くの逆だった。ジムはノブに手をかけると、ドアを開いた。鍵は掛かっていなかった。

「アンダーソン夫人？ いらっしやいますか？」

問いかけたが返事はない。屋敷の中は電気もついておらず、薄暗かった。

二階にいて聞こえないのかもしれないと思い、ジムは階段を登った。足をかけるたびに階段はギシギシと音を立てた。

右手に開いたドアが見えた。中を覗くとどうやら寝室のようだ。

部屋にはどう見ても清潔とは言いがたいベッドが置かれ、その上には同じく清潔とは言いがたい、毛並みの悪い茶色の猫がその大きな体を横たえていた。

ジムにはその姿が、ここは俺の部屋だ。さっさと出て行け。と言っているように感じ、部屋をあとにした。

次を当たろうと、立て付けの悪いドアを開くと、ジムは短く悲鳴を上げて飛び退いた。

そこは書斎のようだったが、その奥のデスクの前の椅子に座る人物を見つけたためだ。ジムはこわごわと声をかけた。

「アンダーソン夫人？」 答えはなかった。

恐る恐る夫人らしき人物に近づいて横にまわると、ジムは再び悲鳴を上げることになった。それはアンダーソン夫人だったが、彼女は死んでいた。

猫だ。猫がやったんだ。ジムの頭の中は狂気じみたその考えでいっぱいになったが、実際にはそうではなかった。

夫人の喉は深く切り裂かれていた。彼女の服とデスクに飛び散った血はすでに乾いていたが、腐敗していないところを見ると死んだ

のはつい最近らしい。その足元には一本の包丁が転がっていた。どうやら彼女はこの包丁で自らの喉を掻き切ったようだった。

ジムは心を落ち着かせようと深く息を吸い込んだ。そして動悸が収まると、辺りを見渡した。

書齋に並べられた本棚にはぎっしりと本が詰め込まれていた。並べられたそのタイトルにジムはぞっとした。

黒魔術について、魔術の深淵、召喚術、靈魂との交信。

ジムにはそれらが何を意味するのかわからなかったが、決して健全な書物とはいえない品々だということはわかった。

デスクに目をやると、一冊の本が置かれていた。血で汚れたそれを手に取ると、ジムは読み始めた。

本の表紙には何も書かれていなかったが、どうやらアンダーソン夫人による日記のようだった。

その日記には日付が書いておらず、それがいつ起こったことなのかはわからなかった。その上、支離滅裂な文章や、理解の出来ない単語も多かった。だがその一説にある記述を見つけ、ジムは戦慄した。

『わたしは猫と靈的に、及び肉体的に交わる事に成功した。それはわたしにとって何よりも甘美な時間だった。そしてわたしは子を授かった』

吐き気を覚えた。猫と交わっただと？ 子供を作った？ ありえない。ひどい与太話だ。そう思いつつページをめくるとそこにはこう書かれていた。

『アレは悪魔だ。悪魔の子だ。わたしはとんでもないものをこの世に産み出してしまった。わたしはアレをこの』

その先はミミズがのたくったような筆跡で意味不明なことが書き殴られ、ジムに判読することは出来なかった。

その時、ジムの背後で猫の鳴き声があった。振り向くと、一匹の黒猫がジムを睨めつけ、毛を逆立てて威嚇していた。

ジムは怖くなり、猫に向かって日記を投げつけたが、命中せずに

猫は走り去った。

ジムは駆け足で屋敷を出た。途中、階段で躓きそうになったが、なんとか持ち直し、転ぶのを免れた。

外に出ると、太陽が沈みかけていた。

ジムは大きく肩で息をしていた。

なんてこった。こんなことがあるわけがない。あつていいはずがない。

ジムの頭の中で今までの記憶がぐるぐると廻っていた。

アリス、リリー、猫、魔術、アンダーソン夫人、日記、血、自殺。

ジムは首をぶんぶんと振り、混乱した頭の中を駆け巡る支離滅裂な感情と思考を追い払った。

とにかく、家に帰ろう。そう思い、ジムは帰路についた。

家にたどり着くと、明かりが消えていた。家にはアリスがいるはずだ。それに、寝るにはまだ早い時間だった。

ジムの頭に不安がもたげた。ドアノブに手をかけると、鍵は閉まっていなかった。ドアを開け、中に入るとジムは叫んだ。

「アリス！ どうして電気が消えているんだ？ アリス！ いないのか、アリス！」

返事は無かった。ジムの不安は恐怖へと変わり始めた。

居間にも、キッチンにもアリスはいなかった。なら寝室だ。ジムは急いだ。

寝室のドアを開くと、アリスはベッドに横たわっていた。

「アリス？ 寝ているのか？」

そう言いながら寝室の明かりを付けた。眼前に広がる耐え難い光景にジムは叫び声を上げた。

アリスと、彼女が寝ているベッドは血に塗れていた。ジムはアリスに駆け寄ると、その肩を思い切り揺さぶった。

だがアリスが反応を示す事は無かった。彼女はすでにこと切れていた。

その喉は大きく切り裂かれ、そこから溢れた大量の血はベッドとシーツを真っ赤に染め、床まで濡らしていた。

彼女の顔は苦痛のためか、恐ろしいものを見たためか、あるいはその両方のためか、苦悶の形相を浮かべ、目は見開いたままだった。ジムは息絶えた妻を抱きかかえ、むせび泣いた。

家の外では雨が降りはじめていた。強い風がガタガタと窓を揺らし、その窓から轟音と共に稲光が部屋を照らした。

ジムは自らの嗚咽と鳴り響く雷鳴の中で猫の鳴き声を聞いた気がしたが、それを気にかける余裕は無かった。

ジムはすでに息絶えた妻をベッドに横たえようと、指でその見開いた目を閉じてやった。冷たくなった彼女の唇にキスをする、涙を拭って立ち上がった。

最愛の妻の命を奪われ、ジムの心を満たしていた深い悲しみは、徐々に燃えるような怒りへと変わり始めていた。

ジムは大声で叫んだ。

「よくも妻を殺したな！ 誰だか分かっているぞ、糞猫め！ 姿を現したらどうなんだ、俺が怖いのか！」

答えは無かったが、代わりに雷鳴が轟いた。

「いることは分かっているぞ、そっちが来ないならこっちから行ってやる、覚悟しろ！」

ジムは寝室を飛び出し、居間へと向かった。

変わったところは何も無かった。相変わらず風が窓を叩いている。ジムはそのままキッチンへと向かうと、ナイフスタンドから包丁を引き抜いた。殺してやる。ジムの頭はその一念で満たされていた。居間の電気をつけようとスイッチに手を伸ばしたその時、雷光に照らし出された猫の姿を見た。

二ヶ月ぶりに見たりりーは以前より大きく、邪悪なものに見えた。りりーの灰色の毛並みは血に染まり、べっとり濡れていた。

アリスの血だ。ジムは激昂してりりーに躍りかかり、力任せに蹴

りを食らわせた。だが空振りだった。

リリーは木の葉が舞うような軽やかな身のこなしでジムの蹴りを避けた。ジムはバランスを崩し、もんどり打って倒れこんだ。

即座に足を頭上で回転させ、その勢いで起き上がったが、リリーを見失ってしまった。

気配を感じて素早く後ろを振り向くと、リリーはテーブルの上で今まさに飛びかからんとその身を丸めていた。

ジムは握りしめた包丁をリリーに向かって振り下ろしたが、今回もジムの一撃がリリーを捉えることは無く、ガラス製のテーブルを粉々に叩き割る結果に終わった。

思い切り叩きつけたジムの腕にはガラスの破片がいくつも突き刺さったが、彼は意に介さなかった。

殺す、殺してやる！ 喚き散らしながら包丁を激しく振り回したが、その都度リリーは俊敏に身を躲した。その姿はまるで怒りに我を忘れたジムを嘲笑っているかのようだった。

息を切らし、一瞬動きを止めたジムの顔面をリリーの鋭い爪が捉えた。

ジムは片手で顔を押さえ、後ずさる。眼球を抉られていた。押さええた指の隙間から血が流れ落ちた。

ジムは激しい痛みに喘いだ。残された左目はいまだ怒りに燃え、血に染まった自分の爪をぺろと舐めているリリーを睨みつけた。ジムは包丁を投げつけたが、大きく軌道を逸れてフローリングの床に跳ね返り、壁にぶつかって止まった。

リリーは毛繕いを始めた。

怒り心頭に達したジムは脇にあった電気スタンドを両手で掴むと我関せず、といった顔をして自分の体を舐めているリリーに向かって叩きつけた。

今度こそ、ジムの一撃はリリーを捉えた。

ギャっという耳障りな声をあげてリリーは吹き飛んだ。空中で体勢を立て直そうと身を擦ったが、それは叶わずそのまま壁に叩きつ

けられ、床に崩れ落ちた。

その様子を確認したジムは、その血まみれになった顔に凄絶な笑みを浮かべ、いざ止めをささんと床に転がった包丁を拾い上げると、リリーに向き直った。が、そこにリリーの姿は無かった。

呆気にとられ、立ち尽くしたジムのくるぶしに激痛が走った。見ると、リリーが足に齧りつき、噛みちぎろうと首を振っていた。

「このやろう！」叫んでジムは思い切り足を振り上げたが、リリーは齧りついたまま離れようとはしなかった。

ジムは包丁を突き立てようとリリーに向かって振り下ろした。しかし、その瞬間リリーは足から離れ、包丁はむなしく空を切り、その勢いでバランスを失ったジムの体は床に叩きつけられた。抉られたくるぶしからは大量の血が流れ出していた。

ジムは立ち上がろうと足に力を込めるが、食いちぎられたくるぶしに走る激痛に呻き声を上げ、身を擦った。

歯を食いしばり、今一度立ち上がろうと上体を起こしたその時、首筋に熱い何かが走った。

ジムが首に手をやると、その喉にはぱっくりと傷口が開いていた。次の瞬間、その傷口から噴水のように鮮血が噴き上げ、ジムはその音を聞いた。

ジムは薄れゆく意識の中で、爛々と輝き真つ赤に燃えるその瞳と、口の端を歪めて笑うリリーの姿を確かに見た。

「これにて一件落着ですな」

太鼓腹をさすりながらウィルソン保安官補佐は言った。

リップマン保安官は答えず、ただマジックミラー越しに取調室のジムを見つめていた。

リップマンにはどうしてもジムが全ての事件の犯人だとは思えなかった。この男には前科も無いし、職場でも何の問題も起こしてはいない。隣で突き出た腹をさすっている阿呆はそんな奴こそ怪しんですよ。などと言っただろうが。

「保安官？ まさか、猫がやったなんて事を信じてるんじゃないでしょうね。こいつは妻を殺した拳銃、自殺を図ろうとした、正真正銘のイカレ野郎ですよ」

「そうじゃない。妻殺しとアンダーソン殺しはこいつかもしれないが、巷を騒がしてる連続殺人犯は別人かもしれないと言っているんだ。なににせよ、今の状況では何とも言えん。なんせ肝心の容疑者がこの有り様だしな」

ジムは取調べ室の中で椅子に座り、茫然自失といった様相でブツと呟きながら頭をデスクに何度も打ち付けていた。その右目と首にはいまだ包帯が巻かれていた。

リップマンは思いを巡らせながら呟いた。

「この事件はまだ終わらない。そんな気がするのさ」

果たして、その通りになった。一週間後、あらたに喉を切り裂かれた死体が見つかった。

(後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。
感想、評価等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3131m/>

真紅の血潮に猫は笑う

2010年10月8日14時30分発行